利尻島で地域医療に挑む青年医師
内視鏡検査でがん早期発見に成果

極的に取り組んでいる。地道な努力で、早期がんの発見比率は五割を超えるようになった。

「われわれが新規に診断する悪性腫瘍患者は年間五十人ほどですが、半数以上の人は健診や診察、血液や便の検査、胃カメラなどで見つかっています。いまや内視鏡や超音波診断装置は内科医にとって聴診器代わりになっています。内視鏡の検査は何回やってもつらいものです。十分に説明をして納得してもらわないと、受けてもらえません。私も年に一度胃カメラを飲み、患者のつらさを体験しています。患者さんにはできるだけ検査の流れを説明して、安心してもらうようにしています」

不幸にしてがんが進行した患者には、終末医療も行っている。ある肝臓がん患者の場合は、再発したがんが急速に増大し、黄疸（おうだん）を併発して入院。強い肝不全で島外に搬送できる状態ではなく、家族も地元での治療を強く希望した。

「黄疸の治療は、特殊な内視鏡を使って、ストロー状の管を二本、胆道に留置して改善しました。しかし腫瘍はさらに大きくなり、そばを通る大静脈をふさいで、両下肢が倍に膨れ上がりました。細くなった血管の中にステンレス（金属製の網でできた管）を入れ、血管を広げました。四日ほどで足は元に戻り、本人も家族も喜んでくれました。医療には技術だけでなく、患者、家族の精神的なやすらぎも必要です。島でできることなら、あらゆる可能性を追求していきたいと思っています」

離島の病院は忙しい。自治医大出身の医師三人で、外来・入院合わせて一日二百人に上る患者を診療、健診や保険予防活動のほか夜間・休日の急患や事故による負傷者も多い。島外の病院への紹介は年間千件を超え、帰島後の健康管理も重要だ。当直は三日に一回。勤務時間が一日十四、五時間になることも珍しくない。

「母校の校歌に『医療の谷間に灯をともす』という一節があります。灯をともす私たちは、高度な医学知識、技術の地域での実践をたたき込まれてきました。道内で約四十人の卒業生が、プライマリーケア充実のために頑張っています。利尻島にはこの十四年間、自治医大の卒業生が継続して勤務し、地域医療のノウハウを蓄積してきました。これからも病院の垣根を低くして、地域住民が気軽に来院できる地域の特色を生かした施設づくりを心がけていきます」